

12月から1月にかけて、教育研究所で行った研修会・事業の報告をします。

不登校に関する研修会

実施日：令和3年12月4日（土） ※ オンラインで実施
講師：川上 康則 先生（東京都立矢口特別支援学校 主任教諭）
テーマ：学校や集団への不安・混乱の背景とそのアプローチ

次のような内容を中心に、周囲の大人が『『ないものねだり』ではなく、『あるもの探し』の視点で子どもと接することが大切』とお話がありました。

- ・ 4つの注意機能やワーキングメモリー、空間認知等の、つまずきの原因となるものについての説明や支援法
- ・ ネット依存、ゲーム依存、お試し行動、感覚過敏、ASD、緘黙症などについての説明や支援法

最後に「不登校・登校しぶりの経験をもつ人は、人の気持ちの内面にある『もがき』や『苦しみ』の代弁者になる可能性がある。あなたの存在を待ち望む人が、この社会に必ずいる。」という力強いメッセージをお話いただき、研修会が終了しました。

参加者の感想

- ・ 日々の生活の中で取り入れたいことがたくさんあった。子どもの問題ではなく、私（親）の問題だと強く感じた。学校に行くのではなく、もっと子どもの内面に目を向けたい。
- ・ 自分だけだと思いが狭く、目の前の状況をどうしたらいいかという思考になり、先への不安しかなかった。先生のお話を聴いて、見方・考え方を変えたり、私自身がゆとりをもったりすることが大切ということが分かった。

第2回発達障害の理解と支援研修会

実施日：令和3年12月19日（日） ※ オンラインで実施
講師：吉井 勘人 先生（山梨大学大学院 准教授）
テーマ：「特別な支援を必要とする子どものコミュニケーションと感情のコントロールを育むための個別的な配慮と支援の工夫」

- ・ 注意欠如多動症など、発達障害（が疑われる）の子どもに対して
- ・ 愛着障害や貧困など、障害はなくても特別な支援を要する子どもに対して共に学ぶための工夫や環境の調整（視覚化・焦点化）が重要

感覚処理の偏りの4つのパターンに応じた支援の仕方について、本人の「こだわり」を生かす視点など、条件や環境を変えていくことの大切さを教えていただきました。

参加者の感想

- ・ 自分が普段から行っていることが正しいかどうか不安があり参加した。支援ツールを家庭でも取り入れ、工夫していこうと思った。いつも叱責ばかりだったので、子どもの長所を捉え伸ばしていけば、少し楽に生活していくことができると思う。



QU活用研修会

実施日：令和4年1月6日（木）

講師：武子 みち子 先生（早稲田大学河村茂雄研究室所属

学級経営アセスメントQU専門家派遣講師）

テーマ：学び合う授業を支える学級集団づくり

QU検査でわかること

- ・ いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか。
- ・ 不登校になる可能性の高い子どもはいないか。
- ・ 学校生活で意欲が低下している子どもはいないか。
- ・ 学級崩壊になる可能性はないか。
- ・ 学級集団の雰囲気はどうか。



武子先生から、データのパターンから見た学級の傾向や個人への支援法を教えてください、参加者の先生方が持参した学級データを見ながら、具体的なお助言をいただいたりすることができました。

参加者の感想

- ・ QUテストの結果について、これまで表面的なものしか意識できていなかった。今回「集団としての捉え方」「対応の仕方」「授業での活躍のさせ方」などを教えていただいたので、今後に生かしたい。席替えやグループ編成時も活用したい。

ちゃれんじくらぶ 「調理活動」

令和3年12月7日（火）に、会瀬交流センターで調理活動を行い、けんちんうどんとかぼすソーダを作りました。

参加者は、野菜の皮むきをしたり、味を見ながら味噌をといたり、体重を乗せてかぼすを搾ったり、慣れない作業にも熱心に取り組みました。普段はできない他校の通級生との活動や、親子での共同作業をとおして、協力することの大切さに気付いたり、お互いの良いところを発見したりすることができました。

最後は、ソーシャルディスタンスに留意しながら黙食で、おいしくいただきました。



かぼすを絞っているところ



うどんの汁を煮込んでいるところ



けんちんうどんとかぼすソーダ

編集後記

各校では、卒業、進級に向けて大詰めの時期ですが、新型コロナウイルス感染症対策で、様々なご苦労がおりかと推察いたします。しかし、先生方の工夫や努力によって、子どもたちは「コロナ禍の学校、コロナ禍の楽しみ方」を味わえていることと思います。今年度も残り約3週間となりました。天候が変わりやすい季節です。体調にお気を付けてください。（會沢）